

## 平野 烈介 氏 逝 く

独学力行、立身伝中の人、気象事業従事50年という珍らしい保持者。前大阪支台長、高松管区気象台長、現関西気象協会理事長平野烈介氏は、昨夏以来療養中であったが、客年11月28日国立大阪病院に於て肺ガンの為め遂に亡くなった。享年68才。平素頗る頑健、且つ発足年も浅い、関西気象協会の為め、広く一般から惜しまれている。葬儀は同月30日大阪市天王寺区、興徳寺に於て協会葬を以て行われ、気象庁長官代理、大谷大阪管区気象台長外名士参列非常な盛儀であった。

氏は明治22年香川県仲多度郡多度津町、旧藩士の名家の長男として出生、幼少より才智人より長け、近隣に神童としてうたわれていた。

同38年16才にして、多度津1等測候所へ、初めて技術見習員として職を奉じた。当時名所長の誉れ高かった前田直吉氏の薫陶を受け、実務の傍ら岡田先生の「近世気象学」を繙く外原書を入手して訳読する熱心さで、着々斯学の研鑽に没頭し、一方文芸方面に興味をもち、和漢古今の文学書を涉獵するを好み、また中央文壇へ投稿して、屢々賞を得たようであった。

同44年頃「気象集誌」に「讃岐のそばえ論」（そばえは方言、驟雨の一種）を発表し、同所上席技手の阿比野氏と数回に亘り論戦を展開し、一躍斯界にその名を現わすに至った。

大正元年度の中央気象台練習部に入所、優秀の成績を以て卒業した。

同3年頃宮崎測候所の聘に応じ同測候所主席技手として、栄進転任した。爾來同所々長を助け、所内外の改善進歩に努力し、同所の地位を頗る高めた。

同7年9月兵庫県へ出向、神戸測候所第2席の技手として栄転。親しく堀口所長の指導を受けらるる様になった。

同8年10月、中央気象台臨時出張所が大阪より同所構内へ移転するに及び同出張所員らと合同して、神戸読書会を組織し、洋書の輪読、紹介に努め、調査研究の一端をかり印刷して「読書会報」として発刊した。

更に翌9年8月、海洋気象台が同所構内に創設せられ神戸測候所も合流するよう形となった。

翌10年1月同管内に学習並に斯界普及機関として、「時習会」が組織せられ、機関誌「海と空」（5月創刊）の編集委員に選ばれたが、偶々埼玉県熊谷測候所長の補欠につき、岡田台長の抜擢する処となり、同年4月熊谷測候所長として、31才の若さを以て赴任した。

当時は60代稀れに70代の所長が在職していたから、全く異例の出来であった。

氏は同所に着任して以来、思い切った改善に着手、12年にして全く在来の面目を一新するに至った。

同12年9月関東大震災に際しては、余未だ取まらぬ最中に、米俵を満載した馬車を駆って、中央気象台員の救援に駆けつけたことは、有名な話である。

また同所在職中、産業気象方面の研究発表に寧日なく、貴重な各種の研究成績を中央気象台刊行の「産業気象調査報告」に記載された。

昭和5年、中央気象台大阪支台創設に際し、初代大阪支台長に栄進、大正区鶴町の庁舎に着任し、木津川尻の飛行場の事務をも兼務した。

大阪在任中は天気予報の発表方法の研究に没頭し、傍ら青年職員 of 養成に努め、現在当時の部下であった人達の中堅所長として、現在西日本各地に就任している。

同9年9月、未曾有の「室戸台風」の襲来に遭遇し、大高汐の中に決死的観測を敢行したことは、余りにも有名な話である。

同10年沖縄支台長に転じ、また支那事変中は上海観測所に転任した。

後広島地方気象台長兼米子測候所長、高松管区気象台長等を歴任、同21年3月一旦勇退した。

その後暫時閑所にあった処、偶々大谷管区台長の知遇を得られ、同26年春上阪、近畿防災気象連絡会の複雑な事務を委ねられ、更に同28年秋、関西気象協会が設立せられ、初代理事長として就任、同会の健全なる発達について心血を注ぎ、両会共に今日の盛況の基礎を確立した功績は大きい。次枝夫人との間に3男3女の子福者、スポーツ、勝負事、芸道（文芸を除く）一切を知らず、唯仕事々々の虫であった。なお酒は頗る強く、終夜飲み明かしても乱れなかった。40年来の2食主義者（田口克敏謹記）

